研究ノート

初年次英語教育における破壊と創造：パソコンを活用して想像的・創造的な英文を書く

小　泉　純　一
日本福祉大学　社会福祉学部

Destruction and Creation in the Freshman English: To write English Imaginatively and Creatively by Using ICT

Jun'ichi KOIZUMI
Faculty of Social Welfare, Nihon Fukushi University

Keywords：クリエイティブ・ライティング，パロディ，創造性

はじめに

もともとこの小論は，英語を専門としない学部に在籍する初年次の必修英語クラスで，パソコンやネットから得られる情報やソフトがどのように活用できるか，特にクリエイティブな英文を書く上で，という視点からの取り組みをまとめたものだった．しかし，英文を生み出す主体は学び手本人であり，その内面に英文を生産する仕組みを作った上でなければ，パソコンを活用するという次のステップに進むことはできない．その点では，高校までの英作文とは異なる視点から，クリエイティブな英文を学生に書かせてきた取り組みをまず示す必要があると考えた．それを伝えるには，学生が書いた英文を示すことで，英語を専門としない学部でも，英文を使って自己表現を行える力を学生が持っていることを示したい．そのレベルの英語力がある学生は多くはないが，八割程度の学生はこれから述べる取り組みを好意的に受け止め，それを通して高校までの英語への苦手意識がなくなったと答えている．

大学の英語教育は高校までのそれの延長線上にあると私は考えていない．巨視的に見れば英語力をつけるという点で変わりがないのは確かだが，高校卒業までに英語に対して苦手意識や拒否感を植えつけられた大多数の学生を目の当たりにすると，その原因を追究する必要もあると思える．この苦手意識や拒否感をまず破壊しなければ，大学の英語教育における創造は生じないと私は考える．これまで行われてきた英語教育でも，英語を得意とする学生は少数存在する．しかし，圧倒的多数の学生は英語の学びにうんざりしている．私が対応してきたのはそんな学生たちだった．目の前にいる学生の英語への苦手意識や挫折感とどう向き合うかが教師としての務めだと考えてきた．高校までとは異なる視点から英語をとらえさせ，英語を学ぶ楽しさや喜び，言葉の持つ多様な力を感じさせることができれば，彼らの意識を変えることができると考えた．もちろんそんな破壊工作が常に成功するわけではないが，高校までの英語の学び方がすべてではないことを伝える点では一定の成功を収めてきたと

自負している．どのようなことを行ってきたかと言えば，市販のテキストを使用しない，図書館にある英語絵本を学生に選ばせフレーズ・リーディングを行わせる，気に入った英語の名言をネットから探させる，ネット上にある洋画の予告編などからディクテーションを行わせた上でレポートにまとめさせる．とりたてて難しいことをやらせているのではないのだが，パソコンを使って作業させるだけでも学生の英語への固定概念を壊すには十分だった．ここでは，その中でもクリエイティブな英文を書かせる取り組みと，その展開であるムービー・メーカーというパソコンのソフトの活用方法について述べることにする．

英語教育の理想と現実

パソコン及びネットを通して得られる情報やソフトは生活や文化のあらゆる局面に影響を及ぼすものであり，英語教育においてもそれは充分当てはまる．従来大学の英語教育において担当教員は自分が選んだ市販のテキストを使うことが多かったが，パソコンやネットの普及は教育のために使える英語の素材を爆発的に増加させている．かつてはキング牧師の演説はテキスト化され，CDなどを通してしか利用することはできなかったが，現在ではオバマ大統領の演説は行われた数時間後にはYouTubeやホワイトハウスのホームページにアップされ，ほぼリアルタイムで見ることができる．さらにホワイトハウスのホームページの場合には，英語の字幕までついているので，使い勝手がよい．音声の面だけでなく，視覚的にも，英語が使われている現場と遠く離れていることは，デメリットとはならなくなってきている．情報環境の整った教室を使うことができるなら，英文の聞き取りやディクテーションに加え，情報を得る点でも発信する点でも，教育のあり方は革命的に変わる可能性を秘めている．科学技術がこのように進む一方，それを使いこなす教師と学生の力量はそれに追いついているのだろうか．何を学びの目的とするのかによっても答えは異なるが，今自分の周りの世界で起きていることを，英語を通して認識することを大きな目標に置くのであれば，活用できるものは活用すればいい．では，英語を書くという点では，ネットやパソコンはどのように活用できるのだろうか．

英語教育において，受信型に対する発信型というキーワードが使われるようになって久しい．発信の意味は，学生が主体的に自分の考えを表現すること，さらに英語で表現する運用能力を向上させることの二つがある．英語で書かれたものを日本語に置き換えて理解し，進んだ知識や考え方を自国の文化に受身的に取り入れようとする知のあり方に対し，日本から海外に向けて自分たちの思いや考えを英語に変換して伝えるというあり方は，昔から行われてきた英作文の発想とは性格を異にする部分がある．英語の文法理解や日本語への翻訳を前提とした読解のみが偏重されてきた英語教育に対し，英会話などのコミュニケーション力を身につけさせようというのは，昨今の文科省の戦略にも合致したものだった．但し，与えられた日本文を英語に置き換える英作文の発想とは別に，英語の質問に対して英語で即答できることを目指す点で，日本語から英語に翻訳するのではなく，口頭で発話可能な英文を臨機応変に英語で発想し，発声できること，つまりそのベースには英語で考える思考回路を作ることが前提としてあるのではないだろうか．コミュニケーションは他者とのみ行うのではなく，自分とも行われる．何かが意識の中に生じ，それが内面化されてイメージとなり，言葉で一つの形が与えられるプロセスは，自己の内面で行われるコミュニケーションである．その際，私が強調したいのは，文章を生み出すうえで想像的かつ創造的な力が言葉の中でどのように働いているのか，言い換えると言葉になる手前の漠然とした気持ちやイメージがどのように言語化されているのかということなのだ．日本語を英語に置き換えるという作業にとらわれていると，英語という言葉が持っているそのような言葉の力は見落とされがちなのだが，英語で考えることができるようになれば，その働きを感じることができるようになる．英語教育の一つの目標として，聞くにせよ，読むにせよ，英語のまま理解し，英語で考え，それを英語で発話する力をつけさせることを掲げる必要がある．もちろんこれは究極の目標であり，その過程では日本語の力を借りることは当然である．

英語教育の目標を見据えたにせよ，理想と現実のギャップは大きい．どんなに理想が正しくても，現実がそれに到底追いつかない状況にあるのならば，そんな理想など何の役にも立ちはしない．英語力があり，英語を学ぶモチベーションが高い学生を母集団とできるなら，上で述べた理想も現実可能だろう．高校卒業生の一般的な英語力を考えると，多くの者は，英語に対して苦手意識を持ち，大学に進学した場合も英語関係以外の学部に進学し

た場合は，英語を学ぶ意欲は高くはないのが現実である．そのような現実のなかにあっても，上の目標に向かって進むことは不可能だとは言い切れない．それを行う上で，パソコンやネットを活用してきたのだが，端的に言って，高校までの英語の学びとは異なる素材やメディアを取り入れることで多くの学生の学ぶ意欲は高まったことは確かである．ネットから英語の名言を探させて，それをまとめさせてみたり，ネット上にある日本人が英語を話している動画や英語版のジブリアニメの予告編をディクテーションさせてみたり，俳優の渡辺謙が関係しているネットのサイト kizuna311 の中にある外国からのメッセージを書き取らせてみたりすると，高校までとは異なった次元，つまり日常の生活の中で当たり前に英語が使われていることを学生は再認識し，新鮮な目で自分の周りにあった世界に入っていくことができる．では，想像的かつ創造的な英文を書くという点では，ネットはどのように役に立つのだろうか．

学生の英語能力を分析すると，英語の試験では高い得点を取ることができる学生でも，それが必ずしも運用能力につながっているわけではない．コミュニケーションを重視する英語教育が高校で行われているというが，学生の英語力を見る限り，それが成功しているとは思えない．英語の運用能力が身についていない理由として，高校までの英語の学びでは，英文を和訳したり，断片化した知識を問うような問題を解くこと，英語に関する知識の集積に重きが置かれていること，英作文に関しても，自分の気持ちや考えを英文でまとめて，声にするのではなく，自分とは何の関係もなく，外部にある課題文をどのように英語に置き換えるかという，ある意味パズルを解くような作業となっていることなどがあげられる．つまり，学ぶ内容が自分の外に有り，自分の内面と何の関係も持たない点に，課題があると感じられた．たとえば，自分の好きなものについて英語でスピーチする課題を与えた際，学生の中にはどうすればいいのかがわからず途方にくれる学生もいた．自分の思いや気持ちを英語で表現するという作業に全く慣れていないこと，あるいはそもそもスピーチをするだけの英語力がついていないこと，英語を発声するトレーニングを受けていないことなどの理由が個別学生の問題を複雑にしている．但し，英語を学ぶモチベーションの高い学生が選択した上級生の英語クラスでは，四百語程度の英文のスピーチを行わせることが可能であり，今回私が述べるのは初年次の必修英語クラスで何が行えるのかということである．学生の英語力にも大きな差があるクラスで，どのようにしたら英語を書くことで一定の達成感を学生たちは得ることができるかを課題とした．

ポエトリー・リーディングとネットの動画

私の発想の中心には二つのモデルがあった．その一つはポエトリー・リーディングだった．私の専門は現代アメリカ詩であり，少なからず詩人たちはポエトリー・リーディングの映像をネット上に公開している．詩人に限らず，ロック・シンガーやラッパーも，音楽のつかない，リーディングを披露している者もいる．目で見て意味を理解する表意文字の漢字を持つ日本語は目で読むことに向いた言葉であるのに対し，表音文字で書かれている英語は耳で聞くのに向いた言葉であり，声に出したくなる言葉でもあるのだ．また，英語でインタビューに答えるスポーツ選手や芸能人などの日本人の動画や，日本の文学作品を英語に翻訳したものを朗読する NHK の番組も動画投稿サイトで見ることができ，英語を発声する感覚を学生はつかむことができると考えた．しかし実際に声に出してリーディングするには，英語と日本語の発声の違い，個人の音感の差，英語の発声に対する慣れなどの問題があることを実感した．LL やコールでの訓練を通して英語の発声を向上できる学生もいれば，持って生まれた音感や声の小ささ，ぼそぼそした発声など，英語の声に変えるには時間がかかる性質の問題もあることがわかった．

二つ目は，ネットの動画投稿サイトにある一般人が作った動画だった．そこでは，画像と英文，そしてバックグラウンドミュージックが組み合わさり，独自の空間を生み出していた．詩人たちの作品を自分なりに画像をアレンジして公開しているものあれば，麻薬の弊害を説くオリジナルな動画もあった．当時二年生の選択の英語のクラスで，それらの動画を学生たちに示し，作ってみないかと呼びかけたところ，学生もその気になり，作業は始まった．その後動画はウインドウズに標準装備されているムービー・メーカーというソフトで作ることができること，自分が読み上げる音声の録音方法，バックグラウンドミュージックの取り込み方などは，パソコンを得意とする学生に多くを教えてもらった．完成した作品を年度末の授業で鑑賞し，学生の達成感に私も教師として手応えを感じた．学生の中には，これをきっかけにその後

も自分で動画を作り続けた者もでてきた．画像をいくつか選び，それに合う英文を作成するまでの段階であれば，英語を苦手とする学生であっても，取り組めるだろうと思えたので，初年次の英語クラスでも取り入れることにした．

英作文から英語による自己表現へ

ムービー・メーカーの技術的な作業については最後に触れることにし，自分の思いを英語で書く習慣のない学生に，どのような過程を経て英語を内面化させようとしたのかについてまず述べることにする．音楽でもスポーツでも，いきなりオリジナルの演奏ができたり，好プレーが行えるものではない．まず行うのは，基本的な形の練習であり，その次に行う必要があるのはコピー，つまり既にあるものを真似る作業だろう．そこで漫画の『ピーナッツ』とマザーグースのパロディを学生に作らせた．前者の場合は，絵本の Happiness Is a Warm Puppy や a friend is ... などの数ページを示し，「幸福」，「友人」，「愛情」の定義を学生それぞれに作らせた．英語が苦手な学生にも取り組みやすくさせるため，主語に対する動詞は be 動詞を使うこと．第二文型の補語となる部分に名詞，あるいは動名詞を使い各自創作すればいいことを理解させた．また「友人」に関しては，"A friend is someone who ...." の形を使うよう指導した．さらにその際，ネットから適当な画像を探し出し，それと言葉をセットにするようにさせてみた．以下，二つ学生の作品を紹介したい．

Happiness is standing by your legs.

Happiness is listening to
natural sounds.

ここでは画像は割愛するが，この学生は自分が撮りためた画像を英文と合わせている．最初の画像はジーンズをはいた二本の足だけが画面に映っている．二枚目の画像では，石畳の坂道の左手前に白黒の猫がお座りし，右上のほうを見つめている．これらの写真からは英文の意味をどのように本人がとらえているのかが，具体的に示される．二本の足で大地に立つことの安定性，外界の音に耳をそばだてる猫の画像を見ると，言葉は抽象化の機能を持つが，具体的な瞬間や現場から言葉が生じるのは自然であり，そんな言葉の持つ感じが英語でも存在することをこの作業は認識させてくれる．

私にとってこの作業は英語で詩を読み解く作業と重なる部分もあった．言葉を通して感じられる驚きや感動を学生の作品が与えてくれたからだ．次の作品は英文も手書きで書かれている．

この学生は既存の画像を使っている場合もあるが，適切な画像がある場合は，自分で撮影したものを使っている．三つ目の英文に注目して欲しい．華奢な女性の足と大きな男性の足を俯瞰して撮るという空間の切り取り方自体，いいセンスをしていると褒めるべきだろう．さらにそえられた英文を読むと，写真と英文が新たな意味を作り出す．先程の作品と同じように，英語で書かれている内容を，この書き手がどんな現実の場面から感じているのか，相手への思いを予想させ，それに加えて，「長い道のり」の部分からは，この二人の足がこれからどこまで一緒に歩いていくのかを私は予想し，微笑ましく思った．さらにその次の「愛とはまだ誰も知らないこと」は，前の英文と呼応し，この学生が感じ，表現しようとしている愛情の特性を暗示している．

言葉は言葉だけで完結すべきだという考え方があることは私にもわかるが，言葉と映像が補い合い，どちらか一つだけでは表現できない感動を作ることを拒否する必要はない．英文を書かせる際に映像と組み合わせることで得られる効果は二つあった．一つは英文を書く作業に映像が追加されることで，想像力の働きが加速化され，より創造的な作業になったこと．言葉で表現している内容，言葉を通して感じるイメージが，画像によって可視化されること．言語による認知に画像のイメージが加わることになる．これは言葉が無意識の場から，言葉にな

る前のイメージとして立ち上り，最終的にそれに言葉が与えられるプロセスを再現していると考えられた．言い換えるなら，認知において言葉と画像がお互いを補完していることを示している．両者にはそれぞれ限界があり，その足りない部分をお互いが補完しあっていること，それは母語においても当然であるのだが，外国語である英語においてもそれが当てはまることを学生は感じ取ることができる．もう一つは，言葉と画像を組み合わせることにより，この作業が創造的な喜びや達成感を学生に与えたことだ．映像が言葉の意味を深め，その働きを広げるのなら，積極的に受け止めていいのではないだろうか．英作文の作業だけ行っていたならば，このような感じ方は，学生も教員も体験することはできない．言葉の働きには，決められた内容を伝えることに加えて，未知なる自分の内面世界を発見し，そこで感動を生み出す働きもある．

英文を作成する作業としては他愛のないものではあるが，このレベルであっても，可算名詞に冠詞を付けるなどの処理が行われず，動詞の時制がずれているなどのミスは当然見られた．その程度のミスはまだマシな方であり，英語の統語構造を守ることのできない学生，一般動詞と be 動詞を同一文中に混在させ，両者の否定文，疑問文の作り方を混同している学生もクラスの中に一，二割はいた．日本語で文章関係を決めるものは助詞であり，英語では語順が鍵となるという基本を理解させる必要のある学生が多くいる一方，多少のミスを指摘してやれば済むような学生も少数はいた．一つのクラスに多様な英語力の学生が存在することは，教員にとっての障壁にも感じられてきているのだが，それを前提とした上で，英語を使って自分の内面を表現する際に心と体の中で起きていることを感じさせる点では，高校までの英語力の差は問題にはならなかった．多様な英語力の学生が同じ教室にいることをむしろ力にする方法もあると私には思える．英語に極端な苦手意識を持つ極少数の例外を除き，学生は各々のレベルで英語と向き合うことができたと思う．

さらに効果的だったのは，お互いの作品を学生に示したことだった．課題を教員に提出して終わるのではなく，他の学生の作品を知ることで，この英文を創造する作業はお互いの経験を共有する作業に変質したのだと思われる．学生の作品を印刷して配布し，ベストスリーを選ばせることにした．以下に学生たちが選んだ作品と，コメントをいくつか抜粋する．実際には映像が添付してあるのだが，それは割愛した．

> A friend is someone who is always beside me when I notice.
> 私の中では考えても出てこなかったことだったけど，これを見たらなんかいいなと思いました．

> Happiness is smiling at little things with everyone.
> このフレーズが好きです．小さなことで笑顔になれるのはとても幸せなことだと改めて思いました．

> Love is living now.
> すごくシンプルなところが逆にいいなと思いました．誰が見ても確実に理解してもらえると思います．

「いいな」と感じることとは，言葉を通して何かの力を感じ取っているのだ．その力とは，言葉で構成されて出来上がる全体像が語りかけてくるものであり，書き手の伝えたい思いでもある．私が研究しているアメリカのある詩人が "May words always befriend you." とサインしているのを見たことがある．言葉とは個人の考えを示すものであり，そして人をつなぐものでもある．どんな他愛のない表現であっても，それが一個の具体的な場から生まれてきた点では，甲乙をつける意味はない．それぞれが貴重であり，人と人をつなぐ働きを英語という言葉が持つことを学生は理解してくれたと思う．

マザーグースのパロディ

次のステップとしてマザーグースのパロディ作りを行わせた理由は，マザーグースが聖書と並んで英語のベースに有り，歌ったり，声に出すことを前提としている点にある．学生の中には初めてマザーグースを知った者もいるので，"One, Two, Three, Four, Five, Once I caught a fish alive" のように覚えやすいものは歌わせたり，早口言葉のコンテストなどを授業で行い，英語の基本的な強弱パターンやリズムを体感させるようにしてきた．一方的に受容するだけではつまらなくなってきたので，力量のある学生がそろった時に，マザーグースのパロディ（学生に対しては分かりやすいように，替え歌と説明した）を二種類作らせてみることにした．何もないところから英文を創作させるより，物まね，つまりコピーから始める方が入りやすいし，マザーグースの一定

の形を残しておけば，元歌のリズムやストレスのパターンを活用できるとも考えた．全体像を把握させるためマザーグースのビデオを見せ，パロディ作りに取り掛からせた．使った作品は二つあり，一つはアルファベットの歌の "A is for an apple pie which ...." である．この歌をベースに，アップルパイを他の語にし，関係代名詞以下の文章も創作させてみた．アルファベット 26 文字分作らせたので，文字によっては苦労するものもあったようだ．アルファベットに合う文字で始まる言葉を考え，それを先行詞とする英文であれば簡単に作れるだろうと予想していたが，苦労する学生も少なくなかった．二つ目は，積み上げ歌の "This is the house that Jack built." この文の "This is～that～. の波線部分に語句と文章を入れ，五節を作成させてみた．こちらの方は関係代名詞の文章が入れ子細工のようにはめ込まれるので，難易度ははるかに高くなった．この作業を行う際も文章だけでなく，文章に合うようなイメージをワード文書に貼りつけさせ，文章とイメージを合わせる形で進めてみた．アルファベットの方であれば，何か統一したテーマを持たせるよう指示をしたところ，アニメのキャラクターシリーズや歌い手などのシリーズを選んだ学生は，言葉と合わせる画像探しが面白さを増加させたようだった．その後，この二つ以外の作品でもパロディが作りやすそうなものを紹介し，パロディ作りを行わせてみた．

学生が実際に作成した作品をいくつか紹介する．初めは，食べ物をテーマにしたアルファベットソングの最初の部分．

A is 4 Allspice which comes from Africa.
B is 4 Bananas which my mother doesn't like.
C is 4 Corns which are sweet.

関係代名詞の文章を作るのに習熟していれば，それほど難しい作業ではないと思えるが，実際には苦労する学生も多い．関係代名詞に限らず，知識として知っているだけでなく，英文を作りだす運用能力という面で学生の英語力を育てる必要がある．考え方と理屈を説明するだけでは不十分であり，生活感の中から湧き上がるものをベースに英文を作らせるのは有効だと思われた．

積み上げ歌の方は，補語の位置に来る名詞を先行詞とする関係代名詞の節を作り，その節にさらに同じ構造を作らなくてはならない点で難しさがある．しかし，そのコツを掴んでいる学生は，同じ文章構造を利用して，次のようなパロディを作ってきた．

This is a cake that I made.
This is a rat that ate the cake that I made.
This is a cat that ate the rat that made the cake that I made
This is an eagle that ate the cat that ate the rat that ate the cake that I made.

特にマザーグースの場合は，本人が何を伝えたいのか以上に，元の歌が持っている形式をどれだけ活用できるかが鍵となると思う．この作業を行ってみた学生の感想の中には，英語のリズムや全体のトーンをつかむことができたという声があった．上のパロディの場合も，元歌のメロディで歌えるようになっている．

前述の二つ以外に，それ以外のマザーグースのパロディをあと二つ紹介したい．この二つは女子学生の作品だったが，以下の二つを書いてきたのは男子学生だった．

The sun is red.
The sky is blue.
My feelings are true.
And so are you.

エドマンド・スペンサーが書いたとも言われるが，読み人知らずのマザーグースとして認知されている "Roses are red" のパロディである．これも上の作品と同じく，基本的な文章の形は残したまま，最低限変更することができる主語と補語を他の語に入れ替え，最終行はそのままにしてある．英文を創作するという点では，物足りなく思えるが，言葉を入れ替えた上で，最終行の「そしてあなたも同じだ」を新しい文脈にどのようにはめ込み，言葉の持つ感情を引き出せるかがポイントとなっている．その点では，こじんまりとはしているが，男子学生の感性も侮れないと私には思えた．

最後の作品は，提出され一回見た段階では，なんのパロディであるのかがわからなかったものだ．

There was a man had a site.
And Yahoo was his name-o.
Y-A-H-O-O, Y-A-H-O-O, Y-A-H-O-O.

And Y-A-H-O-O was his name-o.

Y-A-H-O-O の繰り返しと，二行目と四行目の終りの言葉を見ているうちに，"Bingo" のパロディであることがわかり，メロディに合わせて口ずさんでみたところ，その完成度の高さに驚かされた．後に授業で作成した男子学生に何に注目して作ったのか尋ねたところ，まずこの歌を元歌にすると決め，五文字の名詞を探しているうちに，ヤフーを思いつき，それから後は自然に英文が出てきたとのことだった．これら以外にも，"There was an old woman"，月曜から日曜の出来事を述べる形の "Solomon Grundy"，内容がミステリアスになる "Who killed Cock Robin" などパロディの元歌になりやすいものは多い．但し，マザーグースの場合は元歌のリズムや調子を残すためにも，入れ替える語句は最小限にする必要が有り，学生の思いを自由に表現させる点では限界があると感じられた．

アメリカの小学生に詩を書かせる

さて英語でパロディを学生に書かせる取り組みをしているうちに，アメリカの詩人ケネス・コーク，Kenneth Koch（1925-2002），がアメリカの小学生に詩を書かせる授業を行い，その結果を Wishes, Lies And Dreams: Teaching Children to Write Poetry という書物にまとめていることを友人に教えられ，自分の授業にも取り入れることにした．コークは小学生に詩を教える前に，高齢者を含め大人向けの詩のクリエーティブ・ライティングのクラスも担当していたようだ．アメリカの小学校の中にはポエット・イン・レジデンスなどと呼ばれる詩人を雇用し，子どもたちに詩を書く面白さを伝える授業をしてもらっている小学校がある．コークも同じく小学校で教えた経験を持っている．コークは自分が子どもたちに詩を教える上で何に注意したのかを次のように説明している．

> One thing that encouraged me was how playful and inventive children's talk sometimes was. They said true things in fresh and surprising ways. Another was how much they enjoyed making works of art---drawing, painting, and collages. I was aware of the breakthrough in teaching children art some forty years ago. I had seen how my daughter and other children profited from the new ways of helping them discover and use their natural talents. That hadn't happened yet in poetry. Some children's poetry was marvelous, but most seemed uncomfortably imitative of adult poetry or else childishly cute. It seemed restricted somehow, and it obviously lacked the happy, creative energy of children's art. I wanted to find, if I could, a way for children to get as much from poetry as they did from painting. (Koch 2-3)

コークは子どもたちが本来持っている創造性を如何に言葉で表現できるかにこだわりを示している．教育によって表現の枠にはめるのではなく，その枠を超えて発揮される創造性に期待を寄せている．図工では子どもたちはその才能を開花させているのに，言葉の場合は一部の例外を除き，大人の作品の真似であったり，子どもっぽかったりするものがほとんどで，創造性が発揮されているものは少ないと嘆いている．そこで，言葉においても子どもたちの創造性を引き出す方法の模索が始まり，この本はその過程を示している．

いきなり詩を書かせるのは難しいので，その際「願望」，「比較」，「夢」などの大きな項目を立て，文章の基本形を決めた上で，基本形以外の部分を自由に創作させるという方法をとっている．「願望」，「比較」と「夢」は内容的にも英語の文章を書く上でも，子どもでもとっつきやすいものであることに変わりはない．たとえば「願望」というテーマについてコークは次のように説明している．

> Wishes make a very good early writing assignment. Children are great makers of wishes, and they long to write about them. Asking them to do so gives them a whole lot of new subjects matter they usually don't think about in school. To help them with form I suggest that they begin every line with "I wish," and to make them feel free about what they said I suggested that they make their wishes as wild and crazy as they like. (Koch 85)

自由な発想で子どもたちに詩を書いてもらいたいコー

クの狙いの一つは，学校での勉強という枠を取り払った世界で詩のテーマを考えさせることのなのだろう．決まった枠組みの中で，教員が求めるものが何かを考え，教員を満足させる内容のものを創作するのではない．自分たちの自然な思いを自然に言葉にすることをコークは目標にしている．願望であれば子どもにはたくさん持っているはずなのだ．それを学校で文章にするチャンスがあるかないかは別問題だが，コークはそのチャンスを子どもたちに与えている．その上で，文章は "I wish" で書き始めればいいこと，内容がどんなに破天荒であっても好きなように書けばいいと，指示を出している．

コークは小学校すべての学年の子どもたちに教えていて，低学年の生徒の作品より高学年のそれの方が，当然手が込んだ作品となっている．一年生の場合は次のような作品が示されている．

I wish I was an actress.
I wish there was no boys.
I wish there was only girls.
I wish the street was ice cream.　(Koch 67)

小学校一年生ならこのレベルの英語を書いている．とは言え，冠詞の使い方をマスターしている点は，日本の学生にも意識させる意味はあるだろう．内容に関しては，女優になりたいとか，男の子なんていなければいいとか，通りがアイスクリームだったならなどは，国を越えて理解できるものだろう．四年生の作品はさらに次のように進歩している．

I wish I was a bird to fly overhead.
I wish I was a duck to swim in a pond.
I wish I was a wild horse to run free.
I wish I was a pig to jump in the mud.
I wish I was a cow to moo all day long.
I just wish I was an animal.　(Koch 76)

動物になってみたいという願望が具体的な動物の姿となって示されている．動物の動きが具体的に示されている点，最終行でそれまでの具体性が動物へと一般化されている点に着目できるだろう．三学年進むと不定詞の理解もこのように進んでいる．高学年になるにつれ単純な文型の繰り返しは使わなくなり，内容も社会性が増すようだ．次の作品を書いたのは六年生だった．

If I ruled the world, I would stop
all poverty by ridding the world of money.
I'd save the world of violence
by ridding it of guns.
And to every man ten beautiful girls.
So people can't steal
I'd give everyone seven
of the best cars in the world.
And this way our world
will be the right way.　(Koch 83)

この作品の場合は "I wish" を使うというコークの指示を脱し，より自由に表現できている．本来コークはこのように書かせたかったのだろうが，まだそうできない子どもたちにはより書きやすい指示を与えたのだ．内容的には，出だしは世界から貧困と暴力をなくすという格調高さがあるのだが，半ばからそのためには美女と高級車を与える必要があると，ユーモアを感じさせるようになっている．アメリカの子どもたちが学年が上がるにつれ英語の表現が洗練されて行くことを目の当たりにできる．

「願望」を示す英文表現に続き「比較」では前置詞の "like" を使った表現や同等比較の例文が示され，「夢」では文章の始まりが "I dream" で書き始められ，その後に自分が見た夢の内容を書くように子どもたちは指示されている．このように書かれている子どもたちの文章をいくつか授業で学生に示し，同じような作業をさせることも英文を書くトレーニングとしては有効だった．

英文を書く仕上げ：フリー・スタイル

ここまでの段階で，英文入力にする際の書式上の注意，ピリオドのあとは二文字分空けるなど，英文をパソコンで書く上でのルールや，名詞と冠詞の考え方，時制や三人称単数現在の場合の動詞の処理などの文法の確認を，学生の英語力に応じて並行して行ってきた．打てば響く学生もいれば，繰り返し指摘する必要がある学生もいる．しかし，そのような文法的正しさとは別な位相で，英文を書く面白さ，自分の内面を言葉にする面白さを学生は感じ取ることができる．最後の課題として，先に挙げたコークの雛形を示し，それを使って 20〜30 行程度の英

文を作成するか，あるいは「フリー・スタイル」と称して同じ程度の長さの英文を自由に書くかを学生に選ばせることにしている．自信のない学生は前者を選び，英文を書く面白さを感じた学生は後者を選ぶ傾向がある．

この作業でも英文と画像をセットにするように指導した．学生が作ったフリー・スタイルの作品とこの作業を行った学生のコメントをいくつか紹介する．多くは行分けで書いた詩のようなものになっており，いくつかの作品が組み合わさっている．最初の作品は雲の画像と三行の英文が組み合わさっている．

Are your feelings empty now?
The sky is different every day.
Just like our feelings.

これらの作業を通して，さらに英語に興味を持つことができました．

写真を使って，自分が思っていること，感じていることを表現することも楽しかったです．日本語で表現することは簡単だけど，いざ英語で表現してみようとすると，どうやったら簡単にわかりやすく表現できるのか，とても悩みました．しかし辞書でいろいろな単語を引きながら，それに合った単語を一つの文章にすることは，とても達成感がありました．

また全ての作業を通して言えることですが，高校までに覚えていた単語や文法を改めて再確認することができました．またその中で高校時代と比べて，明らかに英語に触れる時間が少なくなったので，自分自身の英語力の衰えを痛感させられました．私は小学校時代から英語が好きだったので，大学生になってもこの気持ちを忘れないで，いろいろな英語に触れていきたいと思いました．自分自身のこれからの英語の学びについても，とても考えさせられ，良いきっかけとなりました．個人的にもこれからも英語の勉強をしていきたいと思います．また TOEIC も受けてみたいです．

英語が以前から好きだったこの学生は，自分の思いや，感じていることを英語で表現できたことに，日本語と英語の違いを感じているだけに，達成感を得ている．高校までの英語の授業では，自分の持っている英語力を駆使し，何を表現できるのかを考えた経験がなかったわけだが，私はそのチャンスを学生たちに与えることができた．高校時代と比べて大学時代の方が授業の中で英語を学ぶ時間は減るのであるから，授業以外でどれだけ自分から英語を学ぶように仕向けられるかが，大学での英語教育の鍵の一つとなるだろう．なんで英語やるの，という素朴な疑問に対して，必然性を持って学ぶ意識を持たせることができれば，あとは学生に任せればいいと思う．

二人目の作品はネットから取ったと思われる，欧米人の男児二人が女児をはさみ，足を投げ出して泣きながら座っている写真に，次の文書が添えられていた．

Even if my tooth pains, I don't cry!
Even if I am sad, I don't cry!
Even if I am afraid of a ghost, I don't cry!
I will be a big man!
I don't cry anymore.

英作文はすごく楽しいなと思いました．自分の気持ちや，感じることを英語で表してみると，いつもとは違う感じがして，新鮮でした．高校の時までは，勉強としての英作文で日本語の文が決まっていて，すごく嫌だったけど，自由にできて楽しみながら課題をすすめることができました．作っていて感じたのは，日本語は主語，述語がはっきりしていないということです．これが，風情というものだと思いますが，英語は主語，述語がしっかりあるので硬い感じにとらえられるのかと思いました．

一人目と比べると，高校までは英語に苦手意識のあった学生の作品なのだが，論理的に書くのではなく，感じたことを表現しようとしている点，泣いている幼児の気持ちになって書こうとしている点で，泣く原因が具体的に示され，大きくなったらもう泣いたりしないという表現が可愛らしく感じられる．コメントにあるように，高校までの勉強としての英作文と，私が行わせた英文を書く作業をこの学生は異なるものとしてとらえている．高校までの英作文は自由でもなく，楽しめるものでもなかったと述べている．学びには枠は最初必要だが，その枠はある時点で打ち破る必要があると私には思える．大学での英語の学びでは，いま自分が持っている英語力で何が表現できるのかを肯定的にとらえさせる，その方法を私なりに探ってきたつもりだ．そのプロセスを通し学生が自分で得た学び，主部と述部に関する日本語と英語の違

いをこの学生は忘れることはないだろう．

　次の作品は，実際の仕上がりを実感してもらいたいので，学生が提出してきたのと同じ状態で示すことにする．

CLOCK

The clock ticked loudly.
tick tack－

It has a short hand－slow
It has a long hand－fast
It has a thin hand－still faster

The three hands move apart.
But they move on the same board.

The clock ticked loudly.
tick tack－

It says six－good morning
It says six－I'm home
It says six－crying

Each clock watches each person.
But all clocks are running the same direction.

The clock ticked loudly.
tick tack－

Another clock is small.
Another clock is big.
Another clock is very tall.

There are various figures.
But all of them are called "clock".

And there is another thing that every clock has,
－they never return.

　この学生は入学当初から英語力はトップに位置していた．文法上の細かい指摘はしたが，英文の構造に関しては大幅に書き換えさせることはなかった．時計とその針

をテーマにし，針の進む擬声音を活用する構成は文章を書くセンスの良さを示していると思う．時が人によって多様な意味を持つことを示唆し，時計の向こうに人間の姿を見てとり，同一平面を動くだけではなく，過ぎた時は戻らない点でも同じだと指摘するあたりはうまく落ちをつけていると感心した．力量のある学生はこの程度にまで仕上げてくるのだと実感した．

先の三人の学生は女子だったが，次の作品を提出したのは男子学生だった．高校まではどちらかといえば英語を苦手とし，学ぶモチベーションもそれほど強い学生ではなかったようだが，課題として課されたことはしっかり取り組むタイプの学生だった．男性のほうがロマンティックな傾向があるとも思える作品である．最終的にこの学生は，この原稿をもとにムービー・メーカーで自分の声を入れて動画を完成させたのだが，それについては後で触れることにする．

You are always smiley.
I am always unfriendly.

You are always kind.
I am always clumsy.

You are always funny.
I am always average.

You are always lovely.
I'm always unremarkable.

You are always brave.
I'm always coward.

I'm always helped by you.
I don't forget those things.

You are great,
But I'm not good enough for you.

But I have something that I want to tell you.
I need you in my life.

It doesn't matter what people say of me.
I want to express my individuality.

Let's make a wish.
I want to be with you eternally.

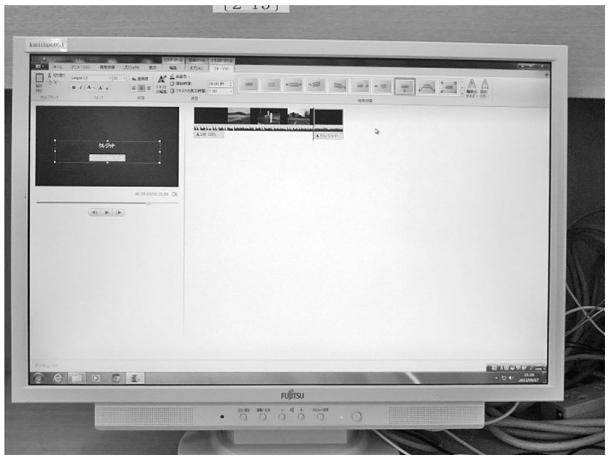
添削する過程で，形容詞が来るべきところに副詞を使うなど不自然な言葉や表現はより適切なものに変えるよう指示を行ったが，基本的な流れやスタイルまで手を加えることはしなかった．但し，「釣り合いが取れない」という部分は当初 "We may disproportionate" となっていたのだが，より自然な表現を示し，本人に選ばせた．前半部は魅力的な「あなた」と取るに足りない「自分」の対比で進み，「しかし」の部分から，相手への自分の思いが語られている．恋愛詩として一定の形になっていると判断した．

英文をムービー・メーカーに落とす

創造的な英語，学生の心を動かすような英文をいかにして作成させるかという点では，ここまで述べたことに尽きている．冒頭で触れたムービー・メーカーというソフトが英語を表現させるうえで使い物になるのかと問われれば，ここまでの前提があれば大いに利用できる．しかし，このソフトを利用すればすべてがうまくいくわけではないだろう．あくまでどのように使いこなすかが重要になる．私の場合，このソフトを使うまでに，英文と画像を組み合わせて表現させる取り組みを行ってきたので，完成した英文と画像をこのソフトに取り込み，新たに行う必要があるのはバックグラウンドミュージックと英文を読み上げる声を録音する作業だった．学生の力量不足で英文を発声させることが難しいと判断した場合は，朗読部分は割愛した．それだけでもパソコンで視聴可能な動画にすることで，その魅力が二倍にも三倍にもなったことは言うまでもない．ここまで述べてきたことではあるが，もう一度その理由を三つにまとめてみる．一つは言葉で表現できるものと映像で表現できるものを合体させ，両者の限界を示すことで，文字と映像の持つ特性を理解することができること．二つ目，これは一つ目の展開でもあるのだが，映像を取り入れることで，文字認識とは異なるチャンネル，より感覚的に英語と接する経路を開くことが可能となり，英語を学ぶモチベーションにもつながったこと．三つ目に，ムービー上に英文を示す際，特に左から右に文字が現れるようにすると，直線

的に英文の認知理解が進む流れが体得しやすくなること，つまり英文の流れのまま理解する過程を再現しやすい点にある．

以下は特にムービー作成に関心はあるが，それを手がけたことのない読者を対象に説明をする．ムービー・メーカーとはウインドウズ系パソコンに最初からバンドルされているソフトである．仮にバンドルされていなくともウインドウズのサイトから無料でダウンロードすることができる．またマッキントッシュにはマッキントッシュの動画処理ソフトがバンドルされおり，これら以外にも動画処理ソフトは多くある．下にある画面は現在のムービー・メーカーの仕様であり，以前は使い勝手の悪いところもあったが，基本的な構成は変わっていない．



右側の大きな空白部分に使いたい画像を使う順番に落とし込み，パソコンに取り込んである音楽を同じように落とし込む．同時に左側の上の画面には選択された画像などが表示され，その時点での画像を動画にしてくれる．また最初にタイトルを，最後にクレジットを入れることも簡単に行える．そして，選んだ画像の上に，言葉を打ち込む．最後に作品をファイナライズすれば，メディアに取り込み，ほかのパソコンでも視聴できるようになる．私が取り組み始めた当時は一度ムービーを完成させた段階で，もう一度ムービー・メーカーに完成した作品を落とし込み，それから英文を読み上げる声を録音しなければならなかったが，現在は最初の作成段階から録音ができるようになっている．

先ほど（前ページ）の男子学生がどのような作品を作成したのかを例に挙げてみる．タイトルとクレジットを除き，使用した画像は 18 枚．前半と後半では流れを意図的に変えている．十行目までは一行につき一枚ずつ，コスモスや水仙，街並みや夕焼け，花畑などの画像に英文が打ち込まれている．十一行目と十二行目では，同じ画面が用いられ，相手と自分の対比から，自分の思いを述べる場面に展開していく．そこでは夜の闇の中に携帯電話の光る画面が使われ，携帯でつながることで助けられたことが暗示されている．十三行目と十四行目では，青空を背景にどっしりとした木の姿があり，相手の存在感を示そうとしているのだろう．十五行目の「しかし」だけはこの文字と枯葉が敷き詰められた森の画像が示され，その後の「伝えたいことがある」という二行では，闇の中で月がきらめく様子が使われている．「自分のことを他人が何と言おうとかまわない」の部分では，青空に向かって四葉のクローバが掲げられ，「自分らしさを表現する」では，握手を交わす手のアップが使われる．次の「願い事をしよう」では草原と木の画像が，最後の一行には海辺で夕日を見つめ，肩を寄せ合うカップルの姿がシルエットで示される．思いを寄せる男女の展開としてはやや型にはまったものにも思えるが，それなりに完成度は高いと判断した．また自然な英文を書いてみるという点では評価できると感じた．その年度のクラスで作成した動画をほかの学生にも見せ，評価をつけさせたところ，この作品はトップの評価を得ている．

学生の手応え

このクラスの場合，ワードで提出するか，動画を作るかを学生に任せたところ，約三分の一の学生は動画を作成してきた．仕上がった作品をワードの場合はプリントし，ムービーは教室で見せ，感想を書かせ，ベスト 3 を選ばせることにした．その結果は，ワードで提出した学生の多くが，このようなチャンスがもう一度あれば今度はムービーを作成してみたいというものだった．またムービーを作成した学生の声としては，最初は大変だったけれど，やり始めたら面白くなって，のめりこんだというものが多かった．自分の思いや考えを一個の作品にするという点で達成感を感じさせることができたのだが，一定の部分では英語で自己表現を行えたことの手ごたえも学生は感じていると思える．前半部で取り上げた，二人の足を画像とした学生が最後の授業で次のようなコメントを書いてくれた．

このレポートに取りかかったとき，全く作業が進んでいきませんでした．英語で詩なんか書けないし，ど

んな言葉，単語を使えばいいかもわからなくて，すごく困っていました．だけど自分の持ち物や家を見てみたら Disney だらけだったり，ダンスが楽しくて仕方なかったり，一人暮らしで金欠だったり，周りに支えられて，私はいつも笑顔でいられたり，そうゆう当たり前の日常の中にたくさん題材があることに気づきました．それからは文を作るのに時間はかかりませんでした．また，この言葉や詩に，どの写真や切り抜きを貼ると，より自分の伝えたいことが伝わるのかをすごく考えました．気に入る写真がなくて撮りに行ったり，周りに協力してもらったり，でもその作業がすごくすごく楽しかったです．題材が題材なので難しい単語は使っていません．すごくレベルの低いものだと自分でも思います．だけど，自分の好きなものを今自分が持っている力だけで表現できることにすごく嬉しさやたのしさを感じました．自分の思いを英語で表現すると最初に聞いた時の漠然とした重苦しい印象が消えました．自分の伝えたいことを，自分の言葉で簡単に表現できることに気がつけてよかったです．

最初に断わっておくと，詩を書くことは最初から強制しなかった．ただし，行わけで英文を書くと，詩のようなものになることは説明した．この学生が当初戸惑ったのは，高校までに学ぶことに抱いてきた枠組のためでもあるだろう．小難しいことを書かなくてはならないという思いを払拭し，毎日の生活の中にテーマがあること，それをわかりやすい英文で表現すればいいと自覚した時点で，解放されたのだと思う．アメリカの詩人の作品にも易しいものも，難しいものもあるが，別にそれはレベルの高低ではない．この学生の感じた達成感，つたないとしても，自分の思いを今持っている自分の英語力で表現できたという手ごたえが大切なのだと思う．ムービー・メーカーはそんな思いを増幅する手段に過ぎないことを機器を過信することへの戒めとして書き残しておきたい．

まとめ

教師として学生に多くを学ばせてきてもらったし，助けられても来た．今回書き記したことも，学生の実践なくして書くことはできなかった．特にムービー・メーカーの使い方に関しては，パソコンに強い学生の助力なければ，私一人で行うことは到底不可能だったろう．また，教室で私の求めに応えてくれた学生一人一人にも感謝したい．教員がいくら頑張っても空回りするだけなら，意味はないのだ．学生が何を学び，達成感を感じるのか，そしてそれが学生の将来にどのように関係するのかが問われなくてはならない．英語を学ぶことで学生の内面の世界も，外面の世界も広がる可能性があることが教師としての私を支えている．エデュケーションの元になってる動詞 "educe" の意味は「引き出す」である．教えて育てるのではなく，学生の中にある力を引き出すことがエデュケーションの真意なのだ．引き出すといっても，教員の役割はソクラテスのような産婆になぞらえることができる．それはすでに生まれてくるものとしてあり，教員はそれが生まれ出る手伝いをするに過ぎない．しかしその行為を生命の誕生という創造的な行為と重ね合わせることができるなら，教育というのは，学習者の外部にある知識をただ詰め込む作業なのではなく，人の内面と外面とのやり取りをしつつ，その狭間で何かが生まれてくる瞬間に立ち会うものなのではないだろうか．幼児が母語を学び発声し，言葉を使いこなせるようになる姿を見つめる親が感じる喜びがある．それと同じ種類の喜びを，学生の作品を通して私も感じることができたと思う．母国語でも外国語でも言葉が持つ力とその働きは多様で，無から言葉が生まれてくるダイナミズムを感じるには想像力が必要であり，言葉を発するには創造力が欠かせない．それを行う上で，ここまで述べてきたように高校までとは異なる英語の学びの視点を学生に与え，実際に英文を作成させる必要があり，その脇役としてパソコンから得られる情報やソフトが大いに力を持つことは言うまでもない．

今回行った取り組みについてある同業者に学生の作った作品を示して，説明したところ，次のようなメールをもらった．

感想にあったように，大変だけど楽しい，という「体験」をすることが大切なんですよね．詩は体験なんですよね．それなしに「知的」チャンネルから入ろうとするから，だめなんですよ．

こころの動かないものには，あたまも働きません，よね．こういう形の方が絶対に身につきます．(英語だけでなく，いろいろなものが.)

それにしても PC での加工技術はめざましいですね．いろんな字体にしたり重ねてみたり．それによって随分違う印象が生じています．このへんも「なに」では

なく，「いかに」を大切にする詩ととても関連のあることなんですよね．

ありがとうございます．いい刺激になりました．

英語を学ぶ術は数多くあり，これだけを行えば誰でも力がつくというものはない．文法であれ訳読であれ，コミュニケーション能力であれ，様々な実践を通して英語の運用能力をつける必要がある．ただし，その根本には学生のやる気，英語を学ぶモチベーションがなければ，ただの「お勉強」に終わってしまう．その点で「大変だけど，面白かった」と感じ，達成感を学生が持つことの意味は大きい．そう思うことができれば，学生は一人でも学び続けることができるからだ．学生の英語力の程度によって，達成感のレベルは異なったものになる．頭だけで知識の処理をするのではなく，口や耳，体で音を体験することで自分の内部で何が起きているのかを意識できれば，言葉の持つ面白さを学生は感じるのだと思う．そしてそれをパソコンが切り開きつつある技術が加速してくれるのであれば，それを使わない手はないだろう．教室での授業は実験の場であっていい．

＊本稿は，社団法人　私立大学情報教育協会，「平成 22 年度 ICT 利用による教育改善研究発表会」（於　上智大学：8 月 7 日）にて発表した「ネットの画像やムービー・メーカーから創造性をはぐくむ英語教材を作る」に大幅に加筆，修正したものです．発表をお聞きくださり，ご質問やご意見をいただきありがとうございました．またコークの詩や詩の教え手としての仕事を紹介してくれた畏友，向山守氏には心からの敬意を表します．本文中で引用した学生たちには，あらかじめ論文等で使用する際の了解を得ています．学生たちの創造力に敬意を表します．

参考文献

Koch, Kenneth, Wishes, Lies and Dreams: Teaching Children to Write Poetry, Harper Parennial, 1999.
Schulz, Charles M., a friend is ..., Ravette Publishing, 2005.
-----, Happiness is a Warm Puppy, Cider Mill Press, 2006.